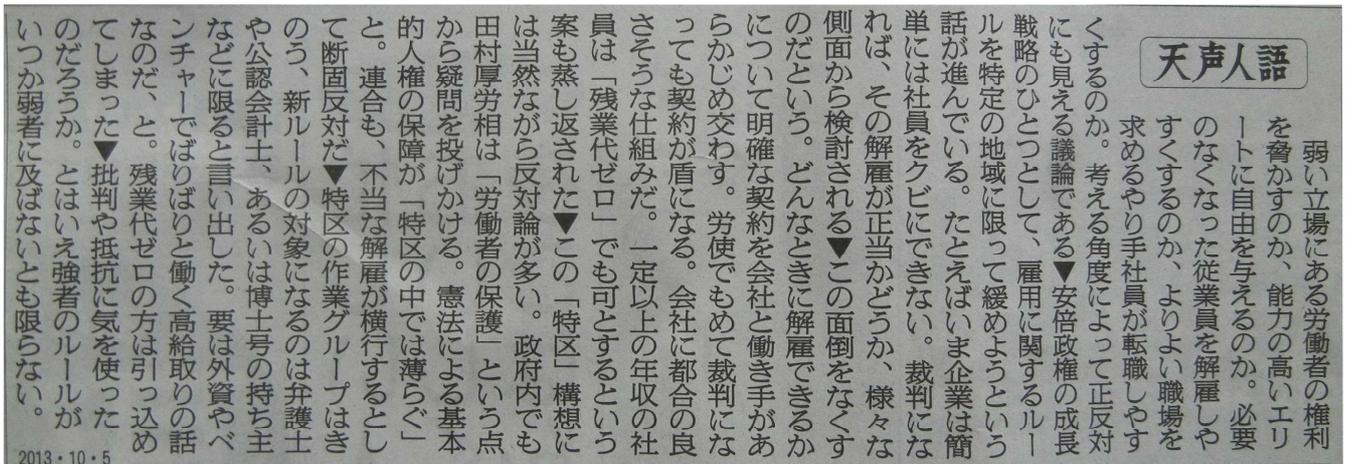


政治・経済活動の視点に「命を守る」を据えてほしいもの

「天声人語」氏の 2013年10月5日の「解雇のできる特区」の記事を読んで



2013年10月5日朝刊「天声人語」より

あまりにひどい「解雇のできる特区」政治・経済の方向に いきどおり

「天声人語」氏の冷静な解説分析に共感する

何か異常な社会の方向に 自分が遅れているのか でも同じ世代が操る政治にもうびつくりです

2013.10月 by Mutsu nakanishi

10月5日の朝日新聞 天声人語欄に 今政府が推進しようとしている「解雇のできる特区」について、上記のような記事が掲載された。「解雇のできる特区」とは、短絡的ですが、その本質は「特区内では、雇用者が好きなときに自由に解雇できるようにする」と私には見える。立場の弱い労働者保護の立場に立つ労働憲法というべき、労働三法の基本方針を勝手に変えようとするものだ。

「正当な理由の無しには 雇用者の首を切れない」とする働く者の基本的な権利を今、剥奪してしまおうとする。

「非正規雇用の雇用をストップし、正規に置き換える」の声は聴かれなくなり、今や非正規雇用者が約4割にもなり、雇用に対する不安感が蔓延するこの時代にこの特区である。 もう びつくりで なんてやねんと。

「解雇特区」の推進論者は「転職を容易にすることで、労働の流動化を促し、経済活動を活発化する」のだという。そして、「アメリカでは そうなっているのだ」と。

また、一部から批判が出るとまたぞろ「この解雇特区の制度は博士号や弁護士など専門職の職種に限るのだ」といいわけがましい解説がつく。 この言い訳に誰がうなづくだろうか・・・。

あの財界リーダーたちの「満面に笑みをたたえた特区歓迎」の言葉が 裏に隠された真実を如実に語っている。国際競争力・グローバル化を引き合いに出し、すぐに「アメリカと同じようにするのだ」という。さも先進国全体がそうになっていて、時代の流れのように言うが、ヨーロッパでは そんなこと今もまかり通っていないのである。

あまりに無策の民主党政権から取って代わった自民政権の政治が、以前よりもまして、数を頼み、心地よい言葉で包み込んで、短絡的に「自分に都合のよいように解釈して政治を動かしている」と見えて仕方がない。

自分たちの集団・仲間を頼りにした強権的な現在の政治体質は封建社会の「村社会」「長いものには巻かれろ 唇寒し」の雰囲気にも見える。 難しい言葉 わけのわからぬ怪しげな言葉はよく使われるのですが、「経済」の語源「経世済民・世を経（おさ）め、民を済（すく）う」などの視点はこれっぽっちもなし。

かつての鉄鋼マン近親感も感じていた安倍さんへの期待が大きかっただけに、最近の政治姿勢にはその失望感も大きい「企業を強くし、新しい産業を興し、日本を強くする。そして 国民みんながばら色に」とは「風が吹けば桶屋が儲かる」式の近視眼。地方の疲弊 若者の想像を絶する格差の増大。 ずたずたとなったセーフティネットと無縁社会が益々拡大する中 急速な社会構造の変化が、弱者を置いてきぼりにしたまま 先へ先へと歩をすすめてゆく。

